

# Special Report

## ジャズ断想

### — 巨星・ガレスビーとの出会い —

やま き こう ぎぶ ろう  
山木 幸三郎



●私は戦後から半世紀以上ジャズの世界で生きてきました。ジャズとの出会いは、ほんのわずかなきっかけから始まり、そして私を変えた神様ディジー・ガレスビーとの出会い。今まで、どなたにもお話ししたことはなかったのですが、ここに遠い昔をふりかえりお話しします。

●1993年1月7日、日本時間午前3時、世界中の幅広いジャズファンから最も愛されたトランペッターのディジー・ガレスビーが惜しくも75歳でガンのため、この世を去ってしまいました。半世紀におよぶ多彩な活動をふりかえりますと、1974年にアメリカ西海岸のモンタレー・ジャズ・フェスティバルで共演できたこと。1984年に南フランスのニース・ジャズ祭での再会。そして1988年、1989年と二度のモンタレー・ジャズ・フェスティバルでの楽しかった日々を思い出します。いそのテルヲ大兄(ジャズ評論家)に「山木幸三郎は僕がガレスビー・ビッグバンドのレコードを聴かせてからその魅力にとりつかれて勉強し、アレンジャーになり、ディジーを神様だと思っている男です」と紹介されてディジーの前に立った時、緊張で体中がブルブルふるえ、結局ひと

ことも話せませんでした。そもそもガレスビーを神様のように思ったのはジャズとの遭遇がなければありえないことでした。

●ジャズを初めて聴いたのは、戦後の焼け跡で進駐軍向け放送でした。それ以前は日本軍歌と民謡しか知りませんでした。その時の印象は、新鮮というより「これはナンジャ？」と不思議に感じたものです。思えば終戦の時は中学2年生でした。生活できないため、東京から千葉方面の農家へ出向き、お米を譲ってもらいました。いわゆる、カツギ屋をして生計を立てていました。今の平井の三業地(料理屋・芸者屋・待合の総称)にある寿司屋でお米を買ってもらいました。その家にはアコーディオン、ギター、マンドリンなど、いろいろな楽器があり、そこの息子さんから音楽を聴かされました。

●その息子さんの友人が、東京駅を根城にしている進駐軍のキャンプ向けミュージシャン・バンドで足りないメンバーを探していました。それがきっかけでズルズルと入ってしまい、気がついた時には進駐軍のキャンプ廻りのバンド・ポーヤ(楽器運び、ステージのセッティング、バンドマンへのお茶くみなど)をやっていました。この当時、私の周りはまだまだ食糧難でしたが、キャンプへ

#### 山木幸三郎プロフィール

●作・編曲家、ギタリスト：1931年4月18日東京都生まれ。千葉県市川工高卒業。日本を代表するビッグバンド「宮間利之&ニューハード」のギタリストとして活躍するかたわら、作・編曲にも精力的にとりくみ多くの作品を書いてきた。数多くのレコーディングの中には、各種の賞を獲得したものも多く、日本のビッグバンドを国際水準にまで引き上げた。特にニューハードには新感覚でパワフルなニューハードサウンドを作り上げ、日本のみならず本場アメリカにも多くの「山木ファン」を持っている。「音楽は楽しくなければならぬ」をモットーに、アマチュアバンドの指導・育成にも惜しみなく尽力している。さらに、自閉症の子どもに対する音楽・劇指導、点描画・絵画・立体作品の製作・個展、スキー、温泉、酒飲みなど独自の世界を展開している。現在最も信頼されているコンポーザーである。

## Special Report



▲ 1974年モンタレー・ジャズ・フェスティバルのステージで踊る山木幸三郎(中央手前)とディジー・ガレスピー(中央右)

行くと山のようなご馳走、そしてウイスキー・ビールなどに身も心も奪われてしまいました。

●先輩たちからはジャズの演奏方法などは全く手ほどきされず、かといって資料なるものは何もなく途方にくれている頃、アメリカのジャズ・ミュージシャンも兵役で日本に滞在していました。その人達がステージに上がってきて「チョット、ガッキ、カシテクダサーイ」と言い、一緒にジャムセッションをやってはいろいろ教えてもらいました。真似をしていくうちに形が整うようになり、それに心の加え方がわかるようになりました。ジャズの魅力のとりこになったのは、その後レコードが聴けるようになってからのことです。

●「鳥類学」という曲を書き、自らバードのように飛び立ったチャーリー・パーカーや20代の若さで亡くなったクリフォード・ブラウン。セロニアス・モンクの「ラウンド・ミッドナイト」、ジャズ・メッセンジャーズの「モーニン」、ジョン・ルイスの「ジャンゴ」、オーネット・コールマンやチャーリー・ミンガスなど、いろいろな黒人ジャズマンの影響を強く受けました。そしてディジー・

ガレスピーのビッグバンドを聴き、今までにない強い感銘を受けたのです。ガレスピーに逢えたということはジャズに逢えたということです。

このように青年時代、初めから何を指すとかは考えていませんでした。ましてジャズを職業にするなどは夢にも思っていませんでした。もし、寿司屋にアルバイトに行っていなかったらと思うと……。

●安保闘争へ向かっていた1950年から1960年の頃、私はディジー・ガレスピー・ビッグバンドのようにメチャクチャ体中が熱く、ディジーのラッパのように天に向かってバラバラにされそうなほど破壊的ではあるが、なんとも若いハーモニーのような快感が走っていたように思います。

●1974年9月2日、モンタレージャズ・フェスティバルが終わり、ディジーは私の隣に座り30分以上も話をしてくれました。初めてなのに、まるで何年も前から知り合いみたいに温かく、まるで磁石に引きつけられるような魅力を感じました。本当に相手を敬う気持ちで話をしてくれた神様、ディジー。私はあと少しの時間でディジーが亡くなった75歳になってしまいますが、あたかも天国で楽しくラッパを吹いているディジーが地上に舞い降り、「思いのままにこの原稿を書きなさい」と言われているような運命を感じます。同時に、私の人生の大きな支えとなってきたディジーを決して忘れることはありません。そして、いつの日かディジーと再会し一緒にジャズ演奏をすることを楽しみに、生涯現役を目指していきたいとします。

▶ 山木幸三郎(左のギター奏者)と「宮間利之&ニューハード」

